尚書大誓篇考

小林信明

一、

尚書の大誓篇に關しては、古來三つの點で問題となつて來た。其の一は、東晉の梅賾の所獻にかゝる僞古文尚書中の大誓篇に關しての問題であり、其の二は、今文諸家並に後漢の馬融鄭玄から魏の王肅の傳へた大誓篇が如何なる性質のものであつたかの問題であり、其の三は、伏生今文並に孔安國の孔壁古文中に大誓が有つたか無かつたかの問題である。東晉の僞古文尚書中の大誓篇に關しては、閻若璩の尚書古文疏證以來、其の說は一定した。卽ち東晉の大誓篇には、後漢の馬融が自家の傳本中に欠けた部分として、嘗て疑を挿さんだ古書の引用文が盡く備つてゐるのみで無く、他の多くの古書を接合した彌縫の餘であることが明瞭で、結局梅賾所獻の大誓篇、卽ち今の古文尚書の大誓篇が僞作にかゝることは疑の餘地がない。然らば馬融・鄭玄・王肅の徒が傳へた大誓は如何かと言ふに、馬融は書序に於て、(尚書正義卷一並卷十一引)[一]大誓の後得を言ひ、大誓篇の文を以つて淺露であると批評してゐるし、鄭玄は書論中に、(尚書正義卷一)[二]大誓が民間に得られたことを述べ、王肅は又、(尚書正義[三]

卷十一）大誓は近得のもので、舊來の本經では無いと明かに之を否定してゐる。是等を綜合して見ると、馬鄭以下少くとも後漢の古文家の傳へた大誓は後得のものであると言ふことになる。然るに大誓後得の問題は獨り古文家の範圍に止らないで、今文も亦自ら此の渦中に在ると言はねばならない。元來大誓篇の後得は、劉向父子並に王充によつて傳へられた消息である。卽ち劉向の別錄に、

武帝末民有得泰誓書於壁內者、獻之、與博士使讀說之、數月皆起傳、以教人、（尙書正義卷一）（文選注引七略同）

とあり、又劉歆の移太常博士書に、

泰誓後得、博士集而讀之、（漢書劉歆傳）

とあり、更には王充の論衡の正說篇に、

孝宣皇帝時、河內之子發老屋、得逸易禮尙書各一篇奏之、宣帝下示博士、然後易禮尙書各益一篇、而尙書二十九篇始定、

とあるのが是である。惟ふ劉向父子の傳へる所と王充の傳へる所とでは、後得の時期を或は武帝の末年とし、或は宣帝の時とする差はあるが、是等は等しく大誓後得の記錄で、是等大誓篇後得の記錄は、やがてそれ以後の大誓が、獨り前述の後漢の古文家の傳本ばかりで無く、今文家系統に於ても、後得に出づるものであらうことを想像させるに充分であり、且つ文選の注の中に引かれた七略の文には、

後得大誓を目して明かに、「今大誓篇是也、」と記るしてゐる。若し果して大誓の後得が事實であり、前漢末より後漢に存在した大誓が後得大誓であるとしたならば、此の後得大誓は如何なる性質のものであらうか、是が大誓篇の第二の問題である。と同時に、大誓後得の事實は、伏生今文並に孔壁古文の各〻の尚書の篇目篇數と如何に結ぶものであるか。卽ち、史記の(四)儒林傳並に漢書の藝文志には、伏生が流亡の後に於て得た尚書の篇數は二十九篇となつてゐり、更に漢書(五)の藝文志には、孔安國が孔壁古文尚書を以つて此の二十九篇を考したと記るされてゐるが、此の伏生今文の二十九篇、並に孔壁古文中に大誓は有つたか無かつたかと言ふことである。伏生今文及び孔壁古文中に大誓が有つたか無かつたかの論斷に重大な關係を持つものに、大誓の後得以前に引用せられたと思はれる多くの大誓篇文がある。後得以前に引用せられた大誓篇文には、後漢の馬融が既に述べた所の（尚書卷十一引）左傳・國語・孟子・荀子・禮記等の先秦の古書に現れてゐるもの、卽ち伏生傳經以前の引用にかゝるものと、後人の加注によつて大誓の文と知り得る尚書大傳(六)、史記(七)の周本紀、漢書(八)の董仲舒傳・武帝本紀其の他に引かれたもの、卽ち伏生傳經以後の引用にかゝるものとの二種がある。抑〻大誓の後得が武帝の末年に在つたか宣帝の時であつたかは、俄に明かにすることは出來ないが、後得が其の何れにあつたとしても、大誓が後得以前に既に所々に引かれてゐて、然も伏生以後のものもあると言ふことになると、後得書に關する考察は、やがて伏生尚書に於ける大誓有無の問題にまで延長されて來る。之が大誓篇の第三の問題であ

る。但第二、第三の問題は實際上は別個のものではないから、此處に大誓篇の第二、第三の問題に就いて、便宜上、專ら清儒の伏生今文尚書の篇數に關する諸說を中心として、大體の方向を考察して見ようと思ふ。（清儒以前を引かないのは、僞古文尚書にからんで徒に問題を紛糾させる懼があるのみでなく、殆んど清儒の所說中に包ねられるからである。）

（一）、馬融書序曰、泰誓後得、案其文、似若淺露、又云、八百諸侯、不召自來、不期同時、不謀同辭、及火復於上、至於王屋、流爲鵬、至五、以穀俱來、擧火神怪、得無在子所不語中乎、（尚書正義卷十一引）

（二）、鄭玄書論亦云、民間得泰誓、（尚書正義卷一引）

（三）、王肅亦云、泰誓近得、非其本經、（尚書正義卷十一、）

（四）、秦時焚書、伏生壁藏之、其後兵大起、流亡、漢定、伏生求其書、亡數十篇、獨得二十九篇、卽以教齊魯之間、（史記儒林傳）

秦燔書禁學、伏生獨壁藏之、漢興亡失、求得二十九篇、以教齊魯之間、（漢書藝文志）

（五）、古文尚書出孔子壁中、孔安國悉得其書、以考二十九篇、得多十六篇、（漢書藝文志）

（六）、書傳有八百諸侯俱至孟津、白魚入舟之事、與泰誓事同、（尚書正義卷一）

（七）、武王渡河、中流白魚躍入王舟中、（素隱曰、此已下至火復王屋爲烏、皆見周書及今文泰誓、）武王俯取以祭、旣渡、有火、自上復于下、至于王屋、流爲烏、（史記周本記）

（殷王紂）乃斷棄其先祖之樂、乃爲淫聲、用變亂正聲、怡說婦人、（史記周本記）漢書禮樂志云、書序殷紂斷棄先祖之樂、廼作淫聲、用變亂正聲、以說婦人、顏師古曰、今文周書泰誓之辭也、

（八）、董仲舒對策云、書曰、白魚入于王舟、有火復于王屋、流爲烏、周公曰、復哉復哉、顔師曰、今文大誓之辭、（漢書董仲舒傳）

元朔元年有司奏議曰、夫附下罔上者死、附上罔下者刑、與聞國政、而無益於民者斥、在上位而不能進賢者退、（漢書武帝本紀）說苑臣術篇引大誓曰、附下而罔上者死、附上而罔下者刑、與聞國政、而無益於民者退、在上位而不能進賢者逐、

二、

清代諸儒の伏生今文の篇數に關する說は、大約四分することが出來る。其の一は伏生二十八篇說で、其の他の三は伏生二十九篇說である。而して伏生二十九篇說の第一は、二十九篇中には大誓は無くて、其の代りに書序が一篇入つてゐるとするもので、第二は、大誓篇一篇が素より有るとするもので、第三は、大誓篇は元々無くて、顧命と康王之誥とが別れて、夫々一篇としての位地を持つてゐたとするものである。

（イ）、伏生尙書二十八篇說

伏生二十八篇說の代表的人物には、惠棟（古文尙書考）江聲（尙書集註音疏）段玉裁（古文尙書撰異）等が有る。惠・江・段の二十八篇の主張は、要するに專ら大誓後得說を信ずる爲に、史記漢書の二十九篇中から一篇を減ずるもので、外に大した理論とする所は無い樣である。殊に江聲に於ては、史・漢の二十九篇とは、伏生の二十八篇に大誓一篇を加へて述べたものか、或は別說の樣に顧命と康王之

誥とが二篇と數へられたのか、何れとも斷定してゐない有樣である。畢竟伏生二十八篇說は、大誓後得の說によつて、史記漢書の二十九篇中から溯つて、一篇を去らうとするものである。但大誓を後得とするならば尙書大傳や董仲舒の對策等に引用せられた大誓篇の文、卽ち後得以前に引用せられたと思はれる大誓の文が當然問題となるが、段玉裁は是等に關しては、劉向劉歆の所謂後得は武帝の末に於てしたとの記錄に誤りが有るので、大誓は必ずや早く漢の初に於て出土したに違ひないとし、先づ第一に後得の時期の訂正を主張する。のみならず、馬融(一)の書序の言によれば、(尙書正義卷十一引)更に先秦の諸傳記には後得大誓に無い大誓の文がある。是に對しては、先秦の古大誓の遺落であると說く。是が伏生二十八篇說の大要であるが、結局二十八篇說の成立の爲には、後得の時期を尙書大傳の編者や董仲舒以前、卽ち漢初にあるとし、且つ此の後得文以前に先秦の古大誓があつたと想定しなければならないことになつて來る。然るに、假令ば上の論述を肯定したとしても、大誓が後得であるからと言ふので、直に史記漢書の二十九篇の數から一篇を減いて、伏生二十八篇とするのは甚だ理由の無いことである。此處に於て伏生尙書は二十九篇で、其の中には大誓は無いが書序が一篇あつたとするものがある。

(一)、馬融書序云、又春秋引泰誓曰、民之所欲、天必從之、國語引泰誓曰、朕夢協朕卜、襲于休祥、戎商必克、孟子引泰誓曰、我武惟揚、侵于之疆、取彼凶殘、我伐用張、于湯有光、孫卿引泰誓曰、獨夫受、禮記引泰誓曰、

予克受、非予武、惟朕文考無罪、受克予、非朕文考有罪、惟予小子無良、今文泰誓皆無此語、吾見書傳多矣、所引泰誓、而不在泰誓者甚多、弗復悉記、略擧五事、以明之、亦可知矣、(尚書正義卷十一引)

(ロ)、伏生二十九篇說、　其の一、(書序一篇說)

伏生尚書は二十九篇であるが、其の中には太誓篇はなくて書序が一篇有つたとするものに、朱彝尊(經義考)陳壽祺(左海經辨)陳喬樅(今文尚書經說考)等がある。此の說は實質上は二十八篇說に近く、亦大誓後得の說に基くものである、

朱彝尊の據る所は、既に大誓が後得で、然も司馬遷・班固が良史であるならば、史・漢の「二十九篇」の辭は、大誓を含まずして二十九でなければならぬ。若しさうだとすれば其の中の一篇は陸德明の經典釋文にも言ふ様に、馬融・鄭玄・王肅等の古文家が序を綜べて一卷としたと同様に、恐らくは百篇の序であらうと言ふのである。陳壽祺は又大誓の後得の際に、之を讀說したのは當時の博士官であることより推して、先づ後得は今文家の傳へた大誓であることを強調し、然る後に漢書の藝文志が古文尚書に關して序を併せ數へてゐる點より、伏生今文には大誓篇は無くて書序が一篇有る可きだと解し、今文尚書有序の說十八條を擧げてゐる。從つて彼の孔安國が二十九篇を考したとの漢書藝文志の言葉は、後得大誓が今文に合入された後で班固が之を追敍したものであり、尚書大傳・史記等の諸書に見れば、太誓の引文は、殘簡逸文又は後來の數子の彌縫に掛るものであらうし、更に董仲舒の對策に引

(一)

(二)

かれた様なのは、逸周書又は中候の類から採られて、然も只「書」と略稱せられたものではないかと疑つてゐる。陳壽祺の子の陳喬樅は父の說を受け、更に漢書の儒林傳には、張霸が二十九篇を分析合し、且つ左傳・書序等から採つて百兩篇の尙書を僞作したとあるが、張霸は孔壁古文を見てゐない筈であるから、張霸の百兩篇の本となつたと言はれる序は今文でなくてはならない、卽ち伏生今文の二十九篇の中には序が有つたと說き出し、且つ諸傳記中の後得大誓に無い部分は、趙岐が孟子の滕文公の注に述べた所の、

泰誓、古尙書百二十篇之泰誓、

の古大誓の逸文だと論じ出す。

要するに伏生二十九篇說中、其の一篇は序であるとする說は、一つには大誓の後得を信じ、又一つには史記・漢書の伏生二十九篇の記事を正しいと見て、之が解決に努力したものである。然るに、序が一篇有つたとするのは、其の本經に關して論ずるならば、本經は猶二十八篇で、若し本經が二十八篇だと言ふことになると、之は史記・漢書の他の記錄、卽ち前述の孔安國が二十九篇を考したと言ひ、張霸が二十九篇を分析合したと言ふ記事に對して、甚だ不都合を生ずることになる。此處に於て、史記漢書に見れたものは後來よりの追敍の言葉であると解釋するので、其の說は結局、史記や漢書等に伏生二十九篇とあるのは專ら夏侯經を指したものだ言ふこととになる。伏生尙書を二十九篇とするの

は、大誓が後得せられた後で、司馬遷以下が追敍したのだと言ふ議論は、既に孔(四)穎達の正義（僞孔序疏）に述べられてゐるが、是は伏生書の本經を二十九篇とするものが當然史記・漢書の記述に對して臨まねばならぬ結論である。此の難を避け様とするものに、伏生尙書にも素より大誓が有つたとするものがある。

（一）、馬鄭之徒、百篇之序、總爲一卷、（經典釋文）

（二）、尙書古文經四十六卷、（漢書藝文志）王先謙曰、四十六卷者、孔安國所得壁中古文、以考伏生二十九篇、得多十六篇、共四十五篇、加孔子序一篇、爲四十六篇、故云四十六卷也、（漢書藝文志補注）

（三）、生求其書、獨得二十九卷、……張覇分折合二十九篇、爲數十、……又采左氏傳並書序、爲首尾、（漢書儒林傳）

（四）、泰誓非伏生所傳、而言二十九篇者、以司馬遷在武帝之世、見泰誓出而得行、入於伏生所傳內、故爲史遷之、幷云伏生所出、不復曲別分折、（尙書正義卷一）

（八）、伏生二十九篇說、　其の二、（大誓素有說）

伏生今文二十九篇中に、素より大誓一篇が有つたとするものに、毛奇齡（古文尙書寃詞）王鳴盛（尙書後案）王引之（經義述聞）魏源（書古微）簡朝亮（尙書集註述疏）等がある。毛奇齡の所論も亦極めて直截的で、伏生書は文帝以來官府の書であり、武帝以後は特に五經博士が之を司り、大誓一篇が俄に攙入す可き理由が無いと言ふのである。然るに王鳴盛になると、大誓の漢代出土を肯定し乍ら、同

時に伏生にも孔安國にも眞の大誓が有つたとする。從つて彼の後得大誓は、伏生・孔安國の兩家に有つた所の眞の大誓と別なものでは無かつたとする。但此の場合、尙書大傳や史記其の他の引用等から考へて、大誓の後得は武帝末より以前、ことによると伏生書よりも以前の漢初に在つて、然も三篇として世間に流傳してをり、且つ先秦の諸傳記に引かれてゐて此の大誓中に無いものは、先秦の舊書が遺落したもので、其の何れもが僞とは言へないとする。王引之になると十二證を擧げて、伏生書は二十九篇で、大誓はもとから有るとし、竟には大誓後得の說は明らかに劉向劉歆の傳聞の誤であるとさへ斷定する。魏源は其の特殊な見解によつて、今古文兩學派は判然と二家を形成するものではなく、伏生書と孔壁古文とは正に一家に歸す可きだとし、其の上朱彝尊・王引之の說に贊成して、伏生尙書は二十九篇で、大誓も勿論其の中に在つたとする。但大誓の逸文については。書序に大誓を三篇としてゐるのにも知られるやうに、大誓は元來三篇であつたが、伏生・孔壁及び後得の各大誓は何れも此の三篇の完本ではなく、僅に上下の二篇だけで、從つて尙書大傳・董仲舒の對策から、司馬遷・馬融等の見た所も、結局此の二篇に止るものであり、他の諸傳記で、例へば司馬相如の封禪書や漢書の婁敬傳の樣に、以上に無い所の大誓の引用文は、殘缺した中篇であると論じ、大誓篇素有の論によつて、太誓後得の說と逸大誓句とを一氣に解決しようとしてゐる。簡朝亮も亦史記・漢書の記事を信ずる所から始まつて、竟には藝文志の今文經二十九篇の自注に、

大小夏侯二家、歐陽經三十一卷、

とあるのは、歐陽氏の方が先に學官に立ち乍ら大小夏侯を前に記るしてゐる點から見て、二十九卷は明かに伏生所傳の卷數で、卷と篇とは全く同じに通ずるのであり、且つ孔安國が校書した時に、今文大誓について何等言及してゐない點から見て、後得說の有るにも係らず、今文古文は何れも初から大誓が有つたとする。但其の大誓は魏源の論の樣に、今古文共に殘缺本で、殘缺の時期はと言へば、實に秦の焚書以前に在つたもので、彼の司馬遷や班固が引き乍ら馬融が疑つた所のものは、皆此の殘缺の餘に出るものだと言ふのである。要するに大誓素有の說は、伏生今文も孔壁古文も共に最初から大誓があつたとするものであるが、諸傳記に引用された文字の解釋に當つては、一は劉向父子の後得の記事に何等かの意味で誤りがあるとし、一は先秦に殘缺した大誓の逸文であるとする點に於て多少の相違がある。

以上伏生尙書の篇目篇數に關して三類の說を略述した。此の三說は夫々面目を異にするものが有るが、此處に計らずも一つの共通點を持つてゐる。それは孔壁古文に就いては、三者共必らず大誓有りとする見地である。先づ惠棟等は深く古文を信ずるので、殆んど孔壁古文については論及してゐない。そして古文尙書を五十八篇（新論・別錄）又は五十七篇（漢書藝文志自注）とするのは、今文

二十八篇に大誓三篇を加へ、更に盤庚を三篇とし、顧命・康王之誥を二篇とした三十四篇に、逸十六篇中から九共九篇を分出した二十四篇を加へたもの、或は其れから武成篇一篇を除いたものだと考へる。卽ち孔壁古文には元から大誓三篇が有つたとする。若し孔壁中に大誓三篇が有つたとするならば、伏生今文中に無い此の大誓が逸十六篇中に入らなかつたのは何故かと言ふと、之に對して江聲は、孔安國の校書の時には既に後得大誓が學官に立つてゐて、當時の今文二十九篇中の一存在となつてゐたからだと述べてゐる。此の解釋から見ると、是等の人々は後得大誓は必ず眞古文だとして少しも疑はない。只段玉裁等は後得大誓と孔壁古文大誓との間には多少の文字の差はあつて、前漢の諸傳記に引かれてゐるものと、後漢の馬融鄭玄以下の述べたものとの相違等が是であると解く。次に二十九篇中書序が一篇あつたとする說は、前述の樣に實質は二十八篇說に近いのであるから、伏生書と孔壁古文との關係に於ても殆んど同樣である。卽ち朱彝尊は、漢書の儒林傳に司馬遷が孔安國について學んだとある記事に基いて、史記に載せられてゐる大誓は眞古文だとし、又陳壽祺は更に劉向が校書した時の記錄である別錄に古文を五十八篇と記るし、且つ許愼の說文は古文を傳へ乍ら其の中に大誓が有る點より見て、孔壁古文に大誓が有つたと言ふのは事實であると言ふ。最後の大誓素有の說は、其の古文に關する構想に於て、既に孔壁古文に大誓篇の存在してゐたことを認めねばならぬものである。但毛奇齡は東晉の僞古文を信ずる傾向に於て甚だ難點を持つてゐるが、王引之の伏生二十九篇說は、自

ら古文中にも大誓一篇が有つたとの主張となり、竟には大誓後得の說を以つて誤りであるとさへ論じ魏源・簡朝亮は共に大誓の先秦殘缺說を取り乍らも、伏生・孔壁の兩大誓は全く同じものであると結論する。之を要するに、以上三系統の所論は、伏生今文に關しては夫々異つた主張を持つてゐるが、孔壁古文に大誓が有つたとする點では、全く其の見解を同じくするものである。

然るに、孔壁古文の篇目についての吟味は、やがて大誓問題に關しての再檢討となり、其の結果は、此處に伏生今文・孔壁古文の何れにも大誓は無かつたとの議論を生じた。それは卽ち顧命・康王之誥の分篇の說である。

(二)、伏生二十九篇說　其の三、（顧康分篇說）

伏生尙書二十九篇中、顧命・康王之誥が夫々一篇として存在し、從つて大誓は其の中に無く、書序も亦一篇としては存在しなかつたと爲るものに、劉逢祿（尙書今古文集解）龔自珍（大誓答問）皮錫瑞（書經通論、古文尙書冤詞平議）邵瑞彭（太誓決疑）等が有る。龔自珍は、大誓に就いての紛々の議論は、畢竟篇目に對する考察の不備と、後得說の妄信と、孔安國・司馬遷の傳經上の交涉から史記の周本紀の文を古文だと信ずることゝの三つから生ずるものだとし、其の積極的な主張に於ては、百篇の書序にも見る樣に、顧命と康王之誥とを分けるのは孔子以來の舊態で、後來彼の歐陽氏等は、伏生書に於て一篇となつてゐる盤庚をわざ〳〵分けて三篇とし、書序の體裁に從はうとするのに、獨り

伏生ばかりが書序に二篇となつてゐる顧命と康王之誥とを併せて一篇とする理由がない。若し伏生が果して顧・康を合篇としたとなると、顧康分篇の姿は馬融(一)・鄭玄に始まるとしなければならないが、馬鄭は何に根據を求めて二篇を分けたのか。且つ又書序に於て其の篇を別にするものが、却て伏生に於て其の篇を同じくすると言ふことは考へられないとして、竟に伏生今文は大誓篇無しで二十九篇でなければならないとする。然らば後得大誓の面目はと言ふに、後得大誓は汲書雑記の類には相違ないが、恐くは陳壽祺の言つた様に汲冢逸周書か、又はそれに近い種類のもので、伏生とは關係のないものであらう、何となれば、劉向父子が傳へる所の後得大誓讀説の博士を考へて見るのに、武帝の時には夏侯は未だ學官に立つてゐないから、此の博士は伏生の弟子とは關係の無いもので、中には後得早出の説を立てるものも有るには有るが、蓋仲舒は「書曰」と述べてゐて大誓とはしてゐない點から見て、後得文を認めて大誓とした時期は、やはり武帝の末年に在ると考へられると言ふ。此の論は終には歐陽・大小夏侯共に全く増篇のこと無しとの主張にまで延びて來る。皮錫瑞は又王引之の説にもとづいて二十九篇有序の論を排し、龔自珍の論から採つて大誓素有の説を駁し、結果顧康分篇説に到達したが、只龔氏が夏侯歐陽に増篇なしとするのには俄には賛成しないで、司馬遷の史記は歐陽尚書即ち伏生本によるものであるから、史記の周本紀(二)に「作顧命、作康誥、」とあるのに見れば、伏生尚書が顧命と康王之誥とを分けて二篇としてゐたことは明瞭である。それが歐陽夏侯氏の時になつて合して一篇とされた

のは、後得大誓が一篇として攙入して來た爲で、つまり同じく二十九篇と言つても、伏生が得た二十九篇と夏侯氏の二十九篇とは、其の内容篇目に違ひがあり、大誓篇は伏生今文にも孔壁古文にもないものが後得の後に於て攙入したもので、然も後得大誓は眞の大誓ではない、從つて尙書大傳に引かれた大誓の章句は、實は逆に大誓の作者が大傳等から摘めたものに過ぎないと結論する、是等の論は、近時邵瑞彭によつて更に詳細に論及された。

邵瑞彭の言ふ所は、伏生尙書には元來大誓は無くて、學官に立てられた今文經は、實は伏生書に後得の河内本大誓を附け加へたものであり、又孔壁古文に於ても其の始には大誓は無くて、中秘に藏されてゐた古文に後から後得河内本大誓を附加したもので、然る後に始めて伏生今文にも孔壁古文にも大誓が有る樣になつたのだとする。卽ち皮錫瑞の說に沿つて、然も歐陽夏侯並に古文尙書に如何にして大誓が合入されたかの過程に論及したものである。此の說の出發點は前にも述べた趙岐の孟子注（滕文公）にあつて、趙岐が古尙書と言つたのは孔子の眞大誓で、今の尙書と言つたのは、東漢の所傳本を今文古文に區別無く併稱したものである。時には趙岐は古文を見てゐないと言ふ人もあるが、萬章篇の注に逸篇の舜典の目を擧げてゐる點から見れば、趙岐が古文を見てゐないとは言へない。趙注の本義は、大誓に於ては、今古文兩派の誦習する所は皆後得河内本であるとの謂ひであるとし、又他面王充の論衡(三)には、或は二十九篇と言ひ、或は二十餘篇と言ふものがあるが、此の兩者には截然たる區

別があり、二十九篇と言ふのは後得大誓を含んだものであり、二十餘篇と言ふのは、伏生本經の大誓を除いた二十九篇のものを指すのだと言ふ。此の伏生今文は大誓無しで二十九篇だとの主張は、自ら又顧康分篇の說に落着する。扨又孔壁古文にも大誓が無いと言ふのは、先づ孔壁の逸十六篇について考へて見るのに、此の十六篇は今文に無いものであるから當然學官に立つ可き筈である。それが立たなかつたのは師法が無かつたからで、若し師法の無い十六篇以外に大誓があり、然も伏生尙書に缺けてゐるとするならば、大誓は後得河內本を待たずに夙に學官に立つ可き筈である。更に又東晉の尙書は僞古文ではあるが、其の五十八篇の篇目は、今文の篇目と逸篇との外に、別に大誓三篇を數へてゐる。是は僞作者が大誓三篇が孔壁本で無いことを知つてゐたからであり、更に魏の正始石經尙書の據る所は孔壁本であるが、之は三十一篇であつて、逸篇及び大誓は之に與つてゐないと斷定する。故に孔壁古文にも亦大誓無しとする外はない。既に伏生・孔壁共に大誓無しとするならば、諸傳記に引かれた所と後得の大誓とは如何なるものであるか。郤氏は之を專ら尙書緯中侯に歸してゐる。卽ち河內本が獻上されない以前に作られた尙書大傳・史記の對策等に引かれてゐる太誓の文の祖本は、恐くは中侯で、後得河內本も、陰陽五行等に照して亦明かに中侯を襲つたものである。そして同じく大誓の文と稱し乍ら、時に異文が見はれるのは、一つには武帝以前の世傳の中侯が一本に止らないこと、又一つには尙書大傳以下が盡く中侯によるとも言へないからで、換言すれば、大誓と稱されるものゝ中

には中侯・大傳・史記・歐陽本・大小夏侯本・賈逵校本・馬注本・鄭注本・王注本・中秘藏河内原本等が有るからで、大誓の異文も決して之を孔壁古文とすることは出來ないと說く。之を要するに、伏生今文・孔壁古文共に大誓無しとする說に於ては、大誓の後得を信じ、史記漢書の伏生二十九篇の記事を是認し、且つ顧命と康王之誥とが分篇として夫々の位地を持つことによつて、伏生にも孔壁にも大誓は無かつたと主張するのであつて、其の後得大誓についての意見は大體に於て之を僞大誓と見、此の僞大誓が後になつて、獨り伏生今文にのみで無く孔壁古文にも攙入したと解するのである。

(一)、(前略)史敍其事、作康王之誥、伏生以此篇合於顧命、共爲一篇、後人知其不可分而爲二、馬鄭王本、此篇自高祖寢命已上、內於顧命之篇、王若曰已下、始爲康王之誥、云々(尙書正義卷十九)

(二)、成王既崩、二公率諸侯、以太子釗見於先王廟、申告以文王武王之所以爲王業之不易、務在節儉、毋多欲、以篤信臨之、作顧命、太子釗遂立、是爲康王、康王卽位、徧告諸侯、宣告以文武之業、以申之、作康誥、(史記周本紀)

(三)、錯從之學時、適得二十餘篇、伏生死矣、故二十九篇獨見、(論衡正說篇)

(四)、梅賾之作僞也、以同序爲同卷、卷與目無涉、不能資爲旁證、若其篇數、仍爲五十八、計存篇三十三、逸篇二十二、太誓三、枚氏割存篇中堯典皐陶謨二篇、以繫逸篇舜典益稷二目、遂致存篇增二、而逸篇減二、總數五十五別加太誓三篇、爲五十八篇、(太誓決疑)

三、

以上四系列の主張は、伏生尚書の篇數を中心として、清儒の大誓篇に關する所說を整理したものであるが、之等の主張は上述の樣に夫々異るものがあり、各說は又自ら他說に對する論駁を持つてゐる。此の樣に複雜な大誓篇の問題は、俄には解決出來さうにもない。が然し此處に我々は一つの面白い關係を發見する。それは上の四說には一つの共通點がある。卽ち孔安國が古文を以つて今文を考したとの漢書の記事の容認で、然も此の事實の上に立つて、大誓後得說をめぐる孔壁古文と伏生今文との相互關係が如何にあるかと言ふことが、此の四說の岐れ目であると言ふことである。換言すれば、以上の四說は、伏生今文に於ける大誓有無の論と、孔壁古文に於ける大誓有無の論との組合せ的な主張に配するのに、後得大誓の眞僞の問題を以つてしたものである。卽ち伏生尚書二十八篇說と、伏生尚書二十九篇有序の說とは、何れも伏生今文には大誓が無くて、孔壁古文には大誓が有り、然も後得大誓は眞の大誓であるとするものであり、伏生尚書二十九篇、大誓素有の說は、伏生今文・孔壁古文の何れにも大誓が有り、且つ後得大誓も亦眞大誓であるとするものであり、又伏生尚書二十九篇、顧・康分篇の說は、伏生今文・孔壁古文の何れにも大誓は無く、其の上後得大誓は僞大誓であるとするものである。惟ふに伏生孔壁の大誓篇有無に關して想定し得る組合せは四つで、以上の他にもう一つ、大誓は伏生に有つて孔壁に無かつたとの論が想定されるが、此の說は今まで全く無いもので、又實際之

が構成され得る條件は、孔安國の校書の事實に照して、全く無いと言はねばならぬ。若し此の一說が全く成立し得ないものであるとすると、伏生・孔壁の關聯に於て殘るものは、上述の三類だけである。然るに此の三類の中でも、先づ第一に、大誓は孔壁中に有つて伏生に無いとの一關聯は、殆んど存在の餘地の無いことが解る。何となれば、上述の伏生二十八篇並に二十九篇有序の說に於て、之等は何れも誤りと言はねばならぬからである。

抑〻伏生二十八篇說の起りを歷史的に尋ねるならば、(一)僞孔叢子並に漢書の劉歆傳の(二)臣瓚の注であるが、臣瓚は恐くは僞孔叢を襲つたものと思はれるから、明確には僞孔叢子に現れたものが最も古い樣である。僞孔叢子は又何によつたかと言ふに、蓋し西漢の經師が好んで天文五行に比類して說を立てたのを、誤傳したものと思はれる。何となれば、僞孔叢子には、伏生の二十八篇は二十八宿に象るとあるが、之は論衡(三)の正說篇に、北斗七宿を併せて尙書の二十九篇に比類したのから北斗を除いたもので、何が故に北斗を除いたかと言へば、之は大誓得後の說に從つて、後得大誓を一篇として北斗に充て、北斗以外の二十八宿を伏生の本經に比して、伏生今文二十八篇の說を構成したものと思はれる。卽ち二十八は後人の臆計で、淸儒が史記・漢書の二十九篇の記錄から理由なく一篇を引き去つて、伏生二十八篇の說を立てたのも、之と同樣に大誓後得の思想に誤られたものと言はねばならない。從つて史記・漢書の二十九篇說に對して、司馬遷・班固が後より追敍したものであると說くのも、彌縫の

論と言はねばならぬ。

次に伏生今文中書序一篇有りとの說は、先づ書序其のものゝ吟味を必要とするが、伏生中に書序があつたとの論には、既に自ら一つの疑問がある。例へば論衡の尙書二十九篇斗宿の說に於て、當時今文百篇の序が有つたとするならば、恐くは尙書を以つて元來二十九篇として斗宿に比類することはあるまい。假りに又陳壽祺の說の樣に今文書序の存在を肯定したとしても、書序を一篇としたとは考へられない。其の故は、彼の漢書儒林傳の張霸僞作の記事に於て、二十九篇を分拆合して數十とし、又左氏傳・書序を雜へ采つたとあるのは、自然二十九篇中に序が一篇として存在する筈の無い證據である。今又更に一歩を讓つて、張霸の僞作は後得大誓の合入後に在つて、時に序は經より除かれてゐた、後得以前は二十九篇の中に在つたのだとしても、それは獨立した一卷ではなくて、多くの書に見る樣に卷末に併せられたものでなかつたとは言へない。(顧實・藝文志講疏)是等より推して、且つ又此の說は伏生の本經に關しては尙二十八篇說で、前述の伏生二十八篇說と類を同うするものであるより見て、恐くは之も亦等しく大誓後得の說に誤られたものであらうと思はれる。

要するに、伏生今文の本經を二十八篇とするのは、何れも大誓後得の說に誤まられたものに相違ないのであるが、更に一般に、彼の增多十六篇中に大誓が無くて、併も孔壁に大誓が有つたと見、大誓の後得の期が武帝の末年又は宣帝の時と見る限り、孔安國校書の事實は、假りにも伏生尙書中に大誓

篇無しとすることは出來ないから、大誓篇が孔壁古文に有つて伏生今文にないとの一系列は、全く存在の餘地がない。若し孔壁有り伏生無しとの說が成り立たぬとなれば、後に殘るものは、孔壁・伏生共に大誓有りの論と、孔壁・伏生共に大誓無しとの論だけである。

(一)、孔臧與弟書曰、臧聞、尙書二十八篇、取象二十八宿、謂爲至然也、何圖古文乃自百篇邪、(孔叢子連叢子)

(二)、當時學者謂、尙書唯有二十八篇、不知本有百篇、(漢書劉歆傳臣瓚注)

(三)、或說、尙書二十九篇者、法北斗七宿也、四七二十八篇、其一曰斗矣、故二十九、(論衡正說篇)

(四)、凡今古文書序、咸附於末、與秦誓合爲一卷也、歐陽經三十二篇者、盤庚分爲三、又析書序自爲一卷、故三十二、然序無章句、故歐陽章句仍止三十一卷、此可爲伏生今文書序不另析篇之證一也、馬鄭之徒、百篇之序總爲一卷、此亦可爲孔壁古文書序不另析篇之證二也、故書序另析爲篇者、後師之事也、揚子法言序附末篇、此非仿書序附卷末之意乎、(漢書藝文志講疏)

然るに大誓素有の說も、甚だ多くの難點を持つてゐる。第一大誓は必らず伏生尙書中に在る可しとの積極的な主張の根據が無い。譬へば王引之の十二章の主張に於ても、大誓素有の爲に大いに辨じた樣に見えるけれども、實は夏侯書の大誓に有る句が、伏生以後・後得以前の諸傳記に引かれてゐるのより推して、伏生にも亦大誓が有る可きだとする消極的な論辨に止るもので、伏生こそ大誓有りとの積極的な理論は殆んどない。假りに有つたとしても、其の後得大誓は眞大誓か僞大誓か。之に對して上

述の伏生二十九篇大誓素有の説の論者は、大誓後得の説を否定するか、でなければ後得大誓と伏生今文・孔壁古文の中の夫々の大誓とは、何れも眞の大誓であるとする。大誓後得の説を更めて全く否定し去ると言ふことは、之は固より大膽なことであるが、後得大誓と伏・孔二大誓とが同じく眞の大誓であるとすることも、後得大誓が博士によつて讀説され、果は傳を起されたと言ふ七錄以下の記事に向つて、甚だ解き難い謎をかけるもので、其の結果は、大誓後得説の否定と同様の難色有るものである。加之、魏源・簡朝亮に在つては、更に孔子の古尚書に於ける古大誓三篇の存在説かち、之に伴ふ先秦殘缺説への再吟味を要する。

扨伏生・孔壁共に大誓有りとするの説には、もう一つの主張が想定される。それは後得大誓を僞大誓とする一つの組み合せである。此の想定は果して可能であるかと言ふに、前述の馬融の書序に現れた大誓後得の消息は、略ゞ大誓を僞作と見ようとするものであるから、後得大誓を僞とすることは差支えないが、同時に馬融・鄭玄・王肅等の後漢以後の古文家の大誓後得説は、但に武帝又は宣帝の時に大誓が後得されたとの意ではなくて、馬・鄭・王當時現行の古文大誓が後得大誓であるとの意と見なければならないから、之によれば孔壁眞古文大誓は何時にか失はれて、其の代りに後得僞大誓が合入されたと考へなければならない。今若し伏生孔壁の何れにも、もと〳〵眞の大誓があつて、孔安國の校書以來互に相符合したとするならば、何が故に後得の僞大誓が今までの眞の大誓に代つて、然もそれ

が今文に於てのみで無く孔壁古文の中にまで其の位地を占める様になつたか。此の點に關しては殆んど、說明がつかない。畢竟、大誓篇は伏孔共に始めより有り、且つ後得は僞大誓であるとの一關聯も、亦成立し得ないものである。

此くの如くにして大誓素有の說が全く否定されるならば、大誓篇の問題は、殘された一關聯、卽ち伏生・孔壁共に大誓なしとするものより外に歸着點はない。但此の場合にも、後得大誓を以つて、或は眞とし或は僞とするの二つの場合が考へられるが、假りに後得を眞大誓とするならば、眞に不都合を生ずる。第一は、馬融の言の樣に、後得大誓に無くて然も先秦の諸記に屢〻徵引されてゐる大誓文の說明であり、第二は、伏生以後・大誓後得までの間のものと思はれる諸傳記、例へば尙書大傳・史記・漢書等に引かれてゐる後得大誓と一致する尙書の文句の說明である。此の爲には、第一に對しては、古大誓の先秦殘缺說を立てるか、第二に對しては、後得の期を訂正して、早く漢初に在るとするかしなければならぬ。之は何れも難かしいことである。若し此の場に至つて後得を眞大誓とすることが出來ぬとなれば、後は伏生・孔壁共に大誓無くして、然も後得は僞大誓だとする一關聯より外は無いので、此の關聯に對して積極的な駁說の立たない限り、大誓篇の問題は大體に於て其の方向を決定したものと思はれる。事實此の關聯は、大誓に關係ありと思はれる一切の條件を滿すことが出來る。卽ち伏生の本經を二十九篇とし、大誓後得の說を、武帝・宣帝の何れに係らず其のまゝに容認し、後得にない

先秦諸傳記徵引の大誓文を肯定し、更に伏生より後得までの間に引かれた後得大誓と一致する尚書の文に對しても、充分之を說明し得る。尚書大傳・史記等の諸傳記、並に漢書中の大誓後得以前に當る記事等に引かれた所の後得大誓と一致する尚書の文を說明し得ると言ふのは、史漢の文は多く大誓と明言しない。其れが大誓の文だと知り得るのは、劉向の說苑や唐の司馬貞・顏師古等の注に依るので、劉向や唐人等は專ら後得以後の大誓によるものと考へるし、又大傳の所引に掛るものは、それが上の史・漢・後得の記事に合ふと言ふに過ぎないから、是を以つて見れば、之等の後得大誓と符合するものは、それがもと〳〵大誓の文であつたと言ふのでは無くて、後得の僞大誓が是等を借りて一篇を構成したと解されるからである。此の一關聯に立つ主張に、前述の伏生二十九篇・顧康分篇の說が有る。

伏生二十九篇・顧康分篇の說は、上來の論述に從へば、大誓篇の問題に關して想定し得る四つの組合せ、更に之に配するに後得大誓の眞僞を以てする八關聯の中、諸條件の下に存立し得可き唯一の關聯に合するものである。併し此の說と雖も全く問題無しとすることは出來ない。と言ふのは、第一顧康分篇は元來古文家の法で、今文家に於ては古來同卷であるとして信じられて來たのに、此の說は伏生今文に於て顧命と康王之誥とを分け、之を二篇とすることによつて史・漢の伏生二十九篇に充てようとしてゐるし、更には後得僞大誓の面目を、逸周書又は中庸の類に歸せんとした點に於て、五行思想史の研究に兼ねて更に檢討を要する樣に思はれる。但是等は伏生・孔壁共に大誓無く、後得は僞大誓

だとする一關聯に對して、積極的な駁論の材料とはならないのみではなく、此の一關聯の成立の爲には現在に於ては結局此の様な、或は之に近い解釋を取らねばならぬのであるから、大誓篇の問題は、伏生二十九篇・顧康分篇の説に於て大體其の方面を決定したと考へられる、左に之を簡單に表示しよう。

	伏生・孔壁の組合せ。	後得大誓の眞僞		既成説の分屬	諸條件への抵觸。
一、	伏生有り、孔壁無し。	眞		無し。	孔安國古文を以つて今文に考し、今文に逸增無し。
		僞		無し。	同右、
二、	伏生無し、孔壁有り。	眞		伏生二十八篇説 伏生二十九篇序一篇説	一、伏生の本經を二十八篇とするのは後人の臆計。 二、孔安國校書の際、大誓は孔壁增多篇中に無し。
		僞		無し。	同右、
三、	伏生有り、孔壁も有り。	眞		伏生二十九篇大誓素有説	一、伏生尙書中大誓有る可しとの積極的根據無し。 二、後得説の否定、若くは、博士讀説、馬融懸疑の難解。
		僞		無し。	伏・孔共に眞大誓より僞大誓へ如何にして轉じたか難解。
四、	伏生無し、孔壁も無し。	眞		無し。	一、先秦幾缺説 二、後得期の訂正、
		僞		伏生二十九篇顧康分篇説	（顧命・康王之誥の分篇）

伏生及孔壁と大誓篇、並に後得大誓の性質に就いては、上述によつて大略之を明かにしたつもりであるが、更に我々は以上の諸説を通じて、もう一つの共通點を發見する。それは後得大誓が今文並に古文の各尚書に併合された時期に就いてゞある。之は專ら漢書藝文志の經二十九卷の自注に「大小夏侯二家、歐陽經三十二卷」とあるのと、同じく藝文志の歐陽章句三十一卷、大小夏侯章句二十九卷、大小夏侯解故二十九篇の記事とを中心として行はれる。卽ち伏生二十八篇説の惠棟は、三十一卷歐陽を以つて、固有の盤庚を分けて三篇とし、之に大誓一篇を加へたか、或は單に大誓三篇を加へたもので、二十九篇夏侯は、伏生の二十八篇に太誓一篇を增したものだとし、伏生二十九篇有序の説の陳壽祺は、劉向父子の所謂武帝末の博士は歐陽子陽（高）で、此の時大誓は學官に入つた。卽ち歐陽經三十二卷は伏生本經及び序の二十九篇に大誓三篇を增したもので、又大小夏侯は、歐陽經に大誓が入つた後に於て特に三篇を一篇とし、序を除いて二十九篇の數に合せたものだとする。大誓案有の説は、初から伏・孔共に大誓有りとするものであるから、今文三家に大誓があるのは勿論で、多くは別に論及してゐないが、先述の樣に、王引之の伏生尚書に大誓有りとの論は、却て三家に必らず大誓が有つたとの主張で、顧康分篇の説に於ては、龔自珍は別としても、皮錫瑞は後得大誓の博士讀説によつて、歐陽大小夏侯の三家は顧康を合して一篇とし、新に大誓を攙入した、其の一篇として併されたものは夏侯であり、三篇とされたものは歐陽であると説き、又邵瑞彭は、後得河內本は立學と共に今文經の中に入り、

一面古文の中にも其の轉寫本が入つて、此處に今古文家の篇數が一定したと說いてゐる。是を以つて見れば、大誓一篇乃至三篇は、歐陽大小夏侯の時には、古文は勿論今文に於ても既に存してゐたと言ふのが諸家の通論であり、又恐くそうであらうと考へられる。因つて以上を統合して結論を下せば、要するに「大誓篇に關しては、

第一、現行の古文尚書中の大誓は魏晉の間の僞作に係り、第二、伏生今文・孔壁古文中には何れにも大誓篇はなく、第三、後漢の諸儒が傳へた所の大誓は後得で、然も後得は僞大誓であり、第四、後得僞大誓は、今文家の歐陽・大小夏侯の頃には今・古文の何れにも合入せられてゐた」

と考へられる。但後得大誓の依據に關しては、暫く疑はしきを闕く次第である、